

# シラカンバ天然更新を目指した複数の 地表処理法の試み

森林総合研究所北海道支所  
橋本 徹

## 研究の背景・目的

トドマツ主伐後の低コスト造林技術として、地掻きによるシラカンバ更新が考えられます。

しかし、地掻きではササ根系と一緒に表土も除去する問題があります。

表土を保持しながらササ再生を抑制させる方法として盛り土、天地返しを試しました。

## 研究の内容・成果

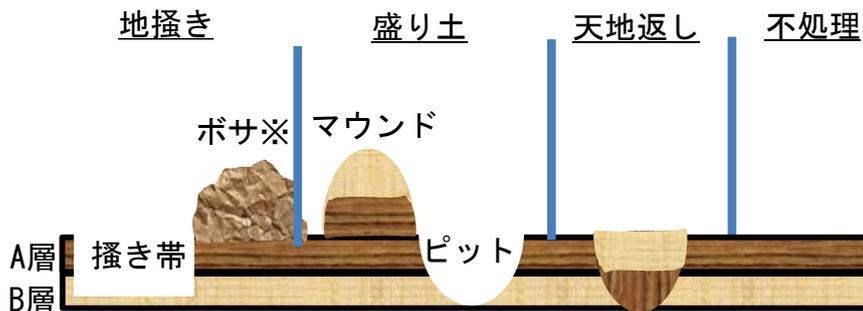


図1 各地表処理法の概念図

※ボサとは、地がきで生成されるササ根系、落ち葉、土砂等の混合物

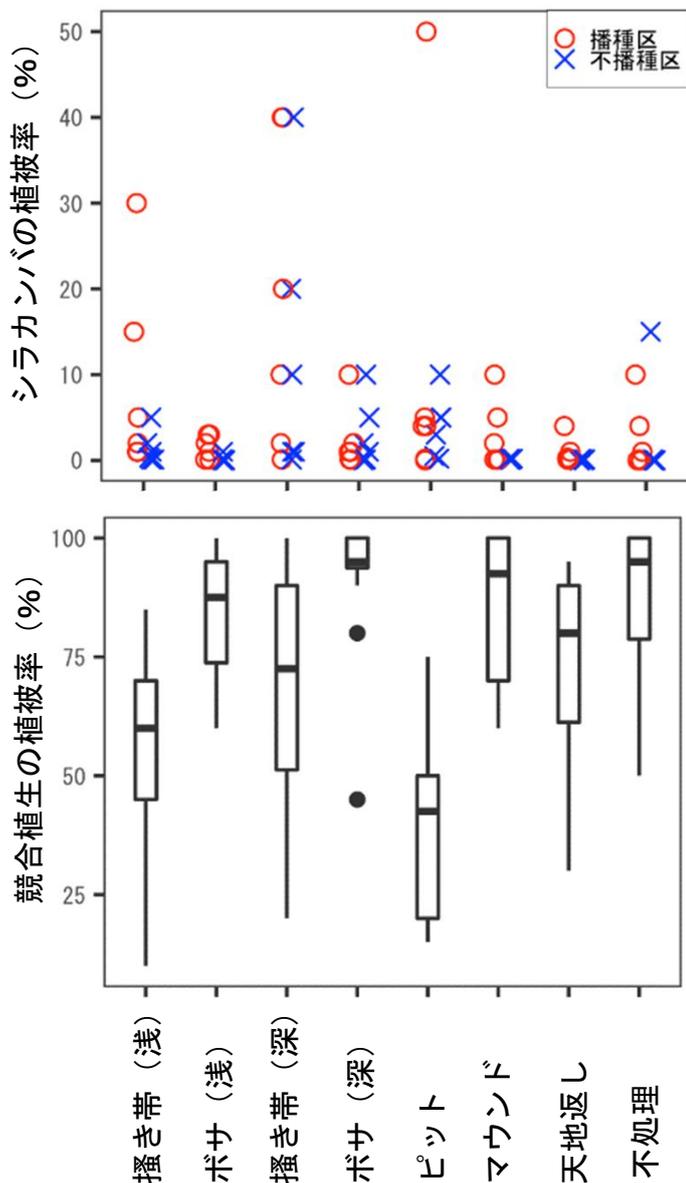


図2 処理2年後における地表処理別のシラカンバ実生と競合植生の植被率

シラカンバ実生の植被率の平均は、シラカンバ種子を約2万粒/m<sup>2</sup>播種した区で6.1%、不播種区で2.9%でした(図2上)。掻き帯(浅)、掻き帯(深)やピットといった凹地で植被率が高い傾向が見られました。一方、盛り土区のマウンドや天地返し区での植被率は凹地に比べて低くなりました。

ササやワラビなど競合植生の植被率は、凹地で低い傾向があり、特にピットで低くなりました(図2下)。一方、マウンドやボサ(浅)(深)で植被率が100%に近くなっていました。天地返し区でも植被率は高くなりました。

今回の試験では、新たな地表処理法として試した盛り土も天地返しもシラカンバの定着にはあまり効果がありませんでした。現時点では、通常の地がきが最も良いと考えられます。

## 今後の展開

盛り土、天地返しでうまくいかなかった原因究明のために、より精緻な調査が必要です。

規模をより大きくし、周囲からのササ再侵入を防ぐような試験デザインにすることで、違った結果になるかもしれません。